

特集1 深層ウクライナ危機

21世紀の皇帝プーチンが目指す旧版図復活

— 2人の専制君主を敬愛

拓殖大学海外事情研究所教授

名越健郎

Kenro Nagoshi



なごし・けんろう

1953年、岡山県生まれ。東京外国語大学卒。時事通信社入社。バンコク、モスクワ、ワシントン各支局、外信部長、仙台支社長などを経て退社。2013年から現職。国際教養大学東アジア調査研究センター特任教授。著書に「独裁者プーチン」（文春新書）など。

ロシアのプーチン大統領が尊敬する指導者は旧ソ連の指導者ではなく、帝政時代の専制君主だ。特にクリミアを含むウクライナの大部分を掌握したエカテリーナ女帝を敬愛しており、「21世紀の皇帝」として女帝の偉業である18世紀の版図復活を図ろうとしているかに見える。

ロシア統治に必要な「強い手」

ロシアのプーチン大統領はソ連体制を支えた旧ソ連国家保安委員会（KGB）のスパイだったことから、ソ連にこだわりがあると見られがちだが、実際には帝政時代への関心の方が強い。帝政期の首都サンクトペテルブルクの出身で、帝政ロシアに関する歴史書を読みあさり、独学で研究している。

2012年2月、政治学者らとの会見で、「あなたに最も政治的影響を与えた歴代皇帝やソ連共産党書記長は誰か」との質問にこう答えた。

「ロシアの歴史は不幸にも、大半は暗く、流血に満ち、排他的なものだった。それでも献身的な努力がなされた時期がある。アレクサンドル・ネフスキーがその例だ。私は

ネフスキーが大好きだ。次がピョートル大帝とエカテリーナ女帝だ。女帝の時代にロシアは領土を拡張した。彼女はピョートル大帝よりも効率的な君主だった。流血は少なく、領域の拡大があった」

ネフスキーは13世紀の名將で、侵攻したドイツ軍やスウェーデン軍を少ない兵力で撃退し、祖国の危機を救った英雄。帝都ペテルブルクを建設したピョートル大帝や、クリミアを含むウクライナの大部分を掌握したエカテリーナ女帝はロシア史を代表する専制君主だ。共に、西欧化、近代化を推進した。プーチンはしばしば、「最も尊敬する指導者」として、ピョートル大帝とエカテリーナ女帝を挙げ、「国家の発展に大きな貢献をした」と評価する。

尊敬する人物に旧ソ連指導者を挙げることは全くない。ソ連はスターリン時代の一時を除いて、システムとして運営されたが、帝政時代は一人の強大な個性によって統治されたとの認識である。プーチンは社会主義的唯物史観ではなく、独特の英雄史観を持っているかに見える。11年のテレビ・インタビューで「今読んでいる本は、エカテリーナ女帝の統治に関する歴史書とドミトリー・リハチョフのロシア思想に関する哲学書だ」と明かしたこともある。

プーチンはロシア史を独学し、統治に関する独特の野心と使命感、歴史観を備えたと思われる。それは、世界最大

の領域を持ち、独裁と専制の歴史に覆われたロシアを統治するには、強大な権力とカリスマ、つまり「強い手」が必要と見なしている。その発想が、自らを頂点とする「垂直統治機構」の構築につながった。「ロシア大統領のポストは、皇帝と言ってもいい。ロシアにはビザンチンの伝統が根強く残っている」と述べたこともある。

ビザンチンとは、東方正教会を国教とした東ローマ帝国。欧米との対立は、冷戦期の東西対立よりも、東西キリスト教圏の歴史的な相克という「文明の衝突」が投影されているとの認識があるようだ。従って、ロシアが中核を占めたソ連邦の崩壊は「20世紀最大の地政学的悲劇」であり、ビザンチン皇帝として、ロシアの版図拡大を図る使命感がある。

ウクライナへの属国意識

米ブルッキングス研究所・米欧センターのフィオナ・ヒル所長は「プーチンは西側の人間とは非常に異なる世界観を持っている。彼にとつて、真の意味で独立した主権国家は米中露くらいしかなく、その他の国は米中露などの庇護下にある。ウクライナやグルジアはロシア側にいるのが当然だと考えている。彼が目指すのは、ロシアが周辺国を掌握し続け、国家再興を果たすことだ。ロシアを強固な国に

築き上げ、家父長的権威を持つ指導者になるのが彼の願いだ」（読売新聞、2014年3月24日付）と指摘する。

プーチンのウクライナ政策にも、属国意識が頻りに顔を出す。08年にプツシユ前米大統領と会談した際、ウクライナの北大西洋条約機構（NATO）加盟問題が議題になると、「ジョージ、君は間違っている。ウクライナは国家と呼べるものではない」と述べたことがある。ウクライナを「マロ・ルーシ」（小ロシア）と呼んだこともあった。

プーチンは会談に遅刻することで悪名高いが、12年にクリミアのヤルタでヤヌコビッチ大統領と首脳会談を行った時、途中でバイクライダーの団体本部に立ち寄り、4時間遅刻したことがあった。昨年訪韓では、朴槿恵大統領を40分待たせたが、4時間待たされたヤヌコビッチ大統領は知事扱いだった。ウクライナを格下扱いし、蔑視していることが分かる。

この時代遅れの宗主国意識が、ウクライナの領土は奪っても構わないという無謀な行動に駆り立てたと思われる。

ウラジミール大公洗礼の地

ウクライナ危機は昨年11月、ヤヌコビッチ政権が欧州連合（EU）との連携協定をキャンセルしたことから親欧米派市民が決起して深刻化した。ロシア紙によれば、プー

チンと強調した。

10〜11世紀に全盛期を迎えたキエフ公国は、キエフ付近に首都が置かれ、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ3国の前身。この当時、3民族は東スラブ族として同一民族であり、ロシアはウクライナ、ベラルーシを弟分と見ている。

「クリミアはロシアの不可分の一部だ」「1954年にクリミアをロシアからウクライナに移管したソ連指導部の決定は憲法違反だ」「ロシア編入は合法であり、ウクライナ中央政府の承認は必要ない」などと併合を正当化したこの演説は、違法行為をごまかす後付けの一方的論理だ。兄弟間の領土移転は正当とする奇妙な発想があり、21世紀の国際社会のルールを公然と蹂躪するものだ。

だが演説は民族愛国主義が高揚するロシア国民を熱狂させ、大統領支持率は80%を超えた。プーチンが演説で「ウラジミール大公の精神的偉業」に触れた時、自らの判断を「ウラジミール・プーチン大公の偉業」と錯覚し、陶醉したかもしれない。ツァーリ（皇帝）プーチンの誕生である。

帝政期に抱くノスタルジー

ウクライナ情勢の焦点は、ロシアがクリミアに続いて親口派住民が多いウクライナ東部に軍事介入するかどうかにある。武装勢力を派遣し情勢を悪化させ、ロシア系住民擁

持ちは外交担当幹部らを集め、「ウクライナ問題は自分が取り仕切る」と述べ、干渉しないよう通達したという。12月には、経済苦境にあるウクライナへの大型融資とガス価格下げを発表。「アメ」によって反政府デモを抑えようとした。プーチンは大型援助を決めた背景として、「同胞国家であり同胞民族であるからだ。ウクライナは今日、深刻な経済、社会、政治問題に遭遇している。同胞国家というからには、近しい家族のように支援しなければならぬ」と強調した。

だが、年明け後、反政府勢力が過激化して状況が極度に悪化。2月にヤヌコビッチ政権が倒れ、親欧米派の暫定政権が発足すると、ロシアはクリミア半島に軍事干渉し、クリミアを実効支配した後、編入住民投票実施、編入条約調印と電光石火で行動し、クリミアの帰属を強引に変更してしまった。大型融資やガス価格下げも撤回した。

3月18日のクレムリンでのクリミア併合演説で、プーチンは冒頭こう述べた。

「クリミアのすべてがわれわれ共通の歴史と尊厳に満ちあふれている。ここには古代ヘルソネス人が住み、（キエフ公国の）ウラジミール大公が洗礼を受けた地だ。ロシア正教を採用した大公の精神的偉業は、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ3民族の文化的、文明的結合を運命付け護を名目に介入に突き進むのはロシアの常とう手段だ。

この点で気になるのは、プーチンが併合演説で、「革命の後、ポリシエビキは幾つかの理由から、ロシアの歴史的な南部地域の広大な領域をウクライナ共和国に編入した。これは人口分布を無視して実施され、今日これらの地域がウクライナ南東部を構成している」と語ったことだ。プーチンは「神に彼らを裁かせよう」と付け加えており、自らが「神」としてポリシエビキの誤りを正す可能性に言及したとも取れる。

プーチンは4月17日のテレビ特番でもこの問題に触れ、「死活的問題はウクライナ南東部に住むロシア系住民の法的諸権利を保証することだ。帝政時代にノボロシアと呼ばれたハリコフ、ドネツク、ルガンスクなどの地域は1920年代、ソ連政府によってウクライナに割譲された。エカテリーナ女帝らによって有名な戦争で獲得されたが、ロシアはこれらの地域を失った」と述べ、失地回復があり得ることを示唆した。

この発言からもプーチンはソ連指導部を忌み嫌い、帝政期にノスタルジーを抱いていることが分かる。自らを皇帝に重ね合わせるプーチンは、敬愛するエカテリーナ女帝の偉業を復活させようとしているとも取れる。18世紀の版図復活を図る21世紀の皇帝は、発想自体が時代錯誤だ。